

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 148

山形福田遺跡

一般県道堀坂勝北線整備事業に伴う発掘調査

2000

岡山県教育委員会

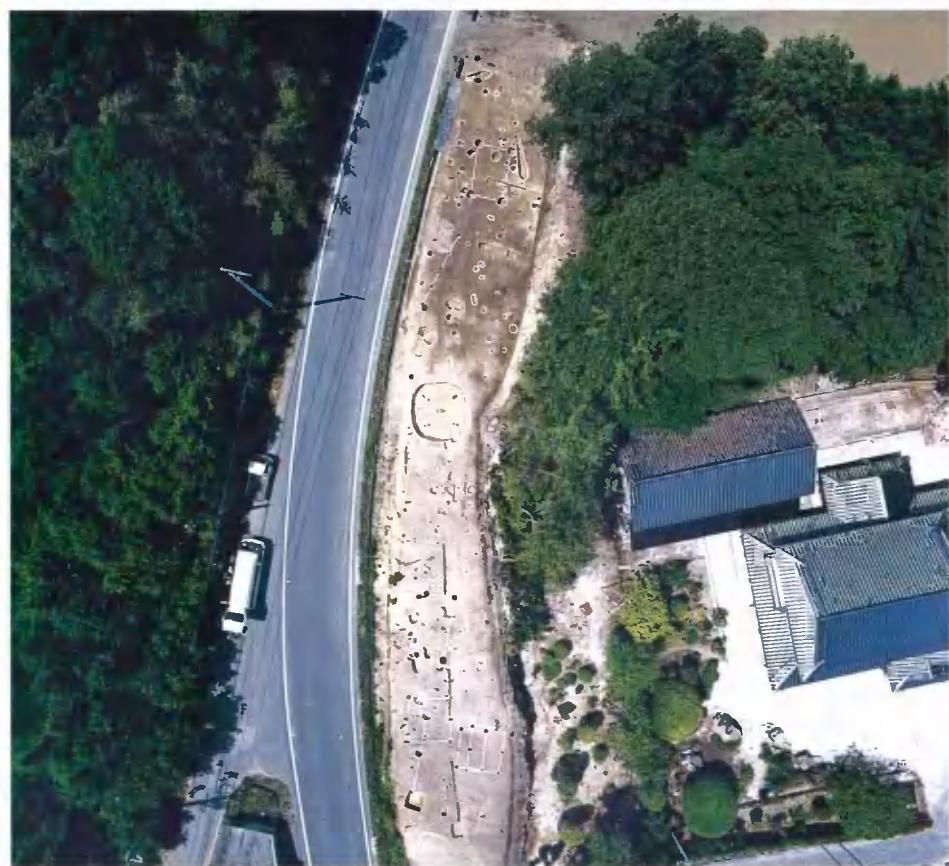
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 148

山形福田遺跡

一般県道堀坂勝北線整備事業に伴う発掘調査

2000

岡山県教育委員会



序

本書は勝田郡勝北町山形に所在する山形福田遺跡の調査報告書です。一般県道堀坂勝北線整備事業に先立って、平成10年度にあらかじめ一次調査をおこない、この結果にもとづき平成11年4月～6月に発掘調査を実施し、その成果を収載したものです。

勝北町は岡山県北部に位置し、日本原台地を含む南北に長い地形の町です。調査地の山形は町内で最高峰の標高791mの山形仙を北に背負い、日本原台地の西端を占める農業地区です。

町内の埋蔵文化財を概観してみると、弥生時代の遺跡は中期から始まり後期のものが多く、現状で総数20カ所が知られています。古墳は、前半期に属するものが少なく、後期古墳を中心として77基が確認されています。現在、町が整備しようとしている「伝黒姫塚」は山形に所在する水原古墳で、陶棺・耳飾・須恵器などが出土した大形横穴式石室をもつ7世紀代の古墳です。中世では6カ所の山城と13カ所の廃寺があります。また、山形には中世から現在まで伝わっている「新野まつり」と呼ばれる岡山県重要無形民俗文化財もあります。

本遺跡の発掘調査の結果、調査区全域において弥生時代中期後葉（今から2000年ほど前）の集落跡がみつかりました。遺構の種類は、竪穴住居・掘立柱建物・土壙などに分かれ、遺物には多数の弥生土器のほか、石包丁・石錘・石鎌・管玉・砥石などが出土しています。

これらの調査成果をまとめた本書が、学術研究に寄与するのみならず、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後に発掘調査および報告書作成にあたり、勝北町役場、勝北町教育委員会、勝北町文化財保護委員会、山形地区住民、勝英地方振興局建設部工務第二課の方々から賜りました種々の御指導と御支援に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年1月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原克人

例　　言

- 1 本報告書は岡山県勝田郡勝北町山形福田における一般県道堀坂勝北線整備事業に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を行ない、平成11年度に発掘調査を実施した山形福田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 確認調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員大橋雅也・岡本泰典が平成10年7月23日～8月6日に43m²を発掘した。発掘調査は、同センター職員浅倉秀昭が平成11年4月5日～6月17日に500m²を発掘した。
- 3 本報告書の作成・執筆・編集は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて浅倉が担当し、その任にあたった。
- 4 石材・玉の鑑定は、倉敷芸術科学大学助教授妹尾護氏に依頼した。
- 5 報告書の作成にあたり、遺物の復元・実測・遺構図トレースはセンター整理作業員に協力を得、遺物写真の撮影については江尻泰幸氏の協力と援助をうけた。
- 6 本報告書に關係する出土遺物ならびに図面・写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　　例

- 1 本報告書に用いた標高は海拔高であり、県道に設置されたベンチマークの海拔高を利用した。また、北方位は第1～3図は真北で、その他は磁北である。
- 2 本報告書の遺構は竪穴住居・掘立柱建物は1/80、土壙・舟形土壙・段状遺構・溝状遺構は1/40、遺物は土器1/4、石器1/2・1/1、玉1/1に統一している。
- 3 本報告書に掲載した遺物には通し番号を付している。土器実測図のうち断面のみのものは、口径の推定ができない小破片である。土器観察表の1～9は確認調査報告書で報告し、復元後再実測して番号を変更し、再び掲載している。J1は玉、S1～S4は石器である。
- 4 本報告書に掲載した第2図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「権」を複製・加筆したものである。
- 5 第4～6図は、「岡山県内遺跡確認調査報告1」岡山県教育委員会1999年発行の第9図・第11図・第12図を複製したものである。

目 次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査経過及び体制	3
第1節 調査に至る経過と一次調査	3
第2節 調査の経過と日誌抄	3
第3節 調査・報告書作成の体制	6
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺構・遺物の概要	7
第2節 壹穴住居	8
第3節 掘立柱建物	9
第4節 土壌	13
第5節 その他の遺構・遺物	16
第4章 まとめ	19

表

報告書抄録

写真図版

図 目 次

第1図 遺跡位置図	第10図 掘立柱建物1 (1/80)
第2図 遺跡位置図 (1/25,000)	第11図 掘立柱建物2 (1/80)
第3図 調査区位置図 (1/2,000)	第12図 掘立柱建物3 (1/80)
第4図 トレンチ配置図 (1/300)	第13図 掘立柱建物4 (1/80) · 出土遺物
第5図 T-4-1~4平・断面図 (1/100)	第14図 掘立柱建物5 (1/80)
第6図 T-4-1 出土遺物	第15図 掘立柱建物6 (1/80)
第7図 遺構全体図 (1/300)	第16図 掘立柱建物7 (1/80)
第8図 壹穴住居 (1/80)	第17図 掘立柱建物8 (1/80) · 出土遺物
第9図 壹穴住居出土遺物	第18図 掘立柱建物9 (1/80)

第19図	掘立柱建物10 (1/80)	第26図	舟形土壙2 (1/40)・出土遺物
第20図	土壤1 (1/40)	第27図	舟形土壙3 (1/40)
第21図	土壤2 (1/40)	第28図	段状遺構 (1/40)
第22図	土壤3 (1/40)	第29図	溝状遺構 (1/40)
第23図	土壤1出土遺物①	第30図	土器溜り1出土遺物
第24図	土壤1出土遺物②	第31図	土器溜り2出土遺物
第25図	舟形土壙1 (1/40)	第32図	黒ボク層出土遺物

写真図版目次

図版1	1. 調査前の状況 (南から) 2. 1次発掘作業 3. T-4-1 竪穴住居断面 (西から)	図版5	1. 南部掘立柱建物群 2. 掘立柱建物5 3. 掘立柱建物8
図版2	1. 遺跡全景 2. 調査区全景	図版6	1. 土壙1 2. 舟形土壙1 3. 舟形土壙3 4. 舟形土壙2 及び高杯出土状況
図版3	1. 調査区北部 2. 調査区中部 3. 調査区南部	図版7	出土土器①
図版4	1. 竪穴住居 2. 土壙断面 3. 復元住居	図版8	出土土器② 石器と種子

表 目 次

第1表	遺構一覧表	第3表	石器・玉観察表
第2表	土器観察表		

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

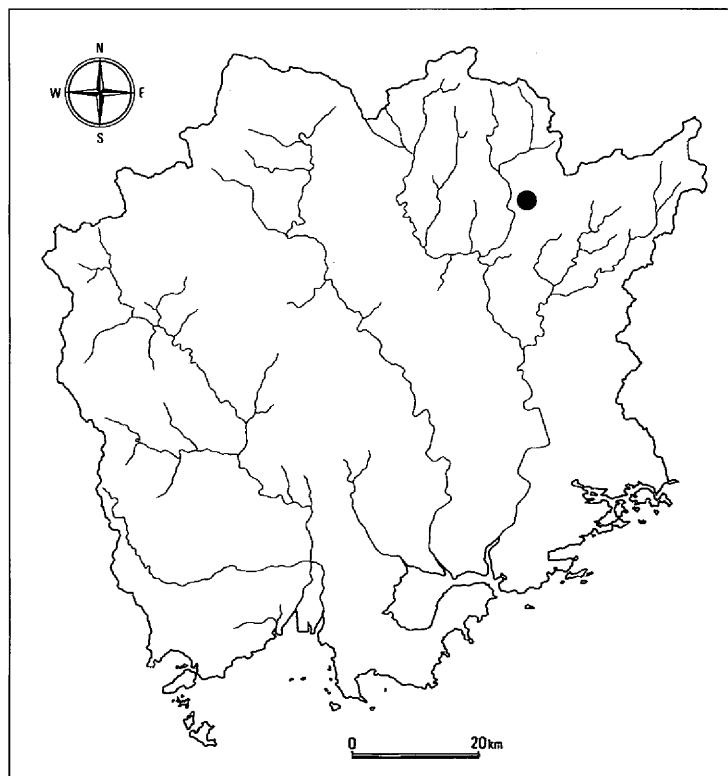
山形福田遺跡（★1）は勝田郡勝北町山形字福田に所在する。勝北町は勝田郡内でも最西北端に位置する。県北最大の都市である津山市に隣接し、津山市街地までの距離は約10kmで、また郡内最大の人口を誇る勝央町の中心地勝間田までの距離は約6kmである。勝北町は南北に長い地形を呈し、北には町内で最も高い標高791mを誇る山形仙がそびえ、西は1.5kmで吉井川の支流加茂川により加茂町と境を接し、中央部には日本原台地（註1）が広がっている。北西部の加茂町境には堰堤の高さ75mもある津川ダムが平成8年に完成している。県内最大の溜池である塩手池は日本原に所在する。山形は本町内では西北端に位置している。山形福田遺跡は地学的には日本原台地上に乗っている。奈義町や勝央町の遺跡も同じ台地上の微高地に作られている。

第2節 歴史的環境

町内の遺跡を時期別に紹介すると、弥生時代には西中大工山で中期の土器片を採集し、山形水原と夏目に後期の住居跡が確認されている。他に18カ所の遺跡が知られている。発掘調査された遺跡は本遺跡が始めてである。古墳時代になると当地では9基の古墳が本遺跡を囲むように存在している。「伝黒姫塚」と呼ばれている水原古墳（●2）は山形地内にあって、本遺跡から北北東約1.5kmの山裾に所在する。（註2）なお、平成9年度に西村古墳群（●3）の発掘調査が町道拡幅工事に伴い実施されている。報告書の刊行はまもなくである。古代に属する遺跡は見つかっていない。中世では山形においては城跡1基と墓地2カ所が知られている。（註3）

津山市の弥生時代中期遺跡を概観してみると、紫保井遺跡・崩塚遺跡・押入西遺跡・ビシャコ遺跡（註4）・沼遺跡（註5）が発掘されている。本遺跡から沼遺跡までの距離は直線で10kmある。この遺跡では竪穴住居の復元も行なわれ、遺跡南側に津山弥生の里文化財センターが平成2年に設立されている。

東隣の奈義町では弥生時代中期の遺跡として御崎野遺跡と野田遺跡（註6）が発掘調査されてい



第1図 遺跡位置図

る。野田遺跡は岡山大学の調査のほかに野田遺跡調査委員会の調査(註7)もおこなわれている。

南東の勝央町では弥生時代中期の遺跡は、植月北念佛塚遺跡（仮称）・鳥羽野遺跡・弥平治遺跡・小中遺跡などが発掘または周知されている。(註6) 植月北念佛塚遺跡は高さ約30cmの袈裟繩文銅鐸を出土している。この銅鐸は現在津山市郷土館が保管している。

- (註1) 光野千春ほか「岡山県地学のガイド」コロナ社 1981年
- (註2) 「勝北町誌」勝北町教育委員会・同町誌編纂委員会 1991年
- (註3) 「岡山県遺跡地図」(第四分冊) 岡山県教育委員会 1976年
- (註4) 「年報津山弥生の里第6号」津山弥生の里文化財センター 1999年
- (註5) 近藤義郎・渋谷泰彦「津山弥生住居址群の研究」「津山郷土館考古学研究報告第2冊」津山市・津山郷土館 1957年
- (註6) 間壁忠彦ほか「日本の古代遺跡」23岡山 1985年
- (註7) 浅倉秀昭「野田遺跡」野田遺跡調査委員会 1984年



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

第2章 調査経過及び体制

第1節 調査に至る経過と一次調査

一般県道堀坂勝北線整備事業に伴う確認調査を実施することについて最初に文化課が勝英地方振興局と協議をもったのは、平成9年11月12日である。当初は3基の中世墓の可能性が指摘されていた。また、地目は山林で、現状は一抱え以上のヒノキの大木が育っている。調査対象面積は500m²である。

一次調査は平成10年7月23日～8月6日にかけて実施した。調査は各塚状隆起にトレントを設定し、その性格解明を期すとともに、南半分にもトレントを設定して遺構の有無の確認を図った。発掘面積は43m²である。結果は、調査地のほぼ全域にわたって1m近く盛り土造成されていることが判明した。中世墓と推定されていた塚状の隆起はこの造成土の凸凹であった。厚い造成土は、ヒノキの巨木が植えられる前、江戸時代後期にさかのぼる民家宅地造成時のものである。したがって、中世墓はなかつたものの、弥生時代の集落跡が良好な状態で遺存していることが判明した。特にT-4-1では竪穴住居と土壙を検出し、土壙から多数の土器が出土している。(註8)

第2節 調査経過と日誌抄

本調査は、平成11年4月5日～6月17日にかけて実施し、調査面積は500m²である。まず表土・切り株・1mに及ぶ近世の盛り土を重機で除去し、排土はダンプで山形地内の民有地に運搬した。調査区内では安全確保・小人数のためにベルト・コンベヤーを使用しなかった。次ぎに黒ボク層上面から遺構検出作業を始め、土壙が1基検出できた。この時、一次調査のうち埋め戻されていたトレントをすべて掘り直して土層・遺構の再確認も行なった。続いて黄色基盤層(火山灰層)ですべての遺構を検出した。調査区は南北に長い上に作業の能率・危険度を考えて南から北に向かって発掘を進めた。弥生土器は南部・中部で多数出土した。遺構として柱穴が多数検出できたので建物にまとめるよう努めたが、竪穴住居・土壙は予想より少なかった。発掘調査は順調に終了し、3度の見学会・住居の復元・調査終了後の危険防止のために柱穴の埋め戻しなども行なった。

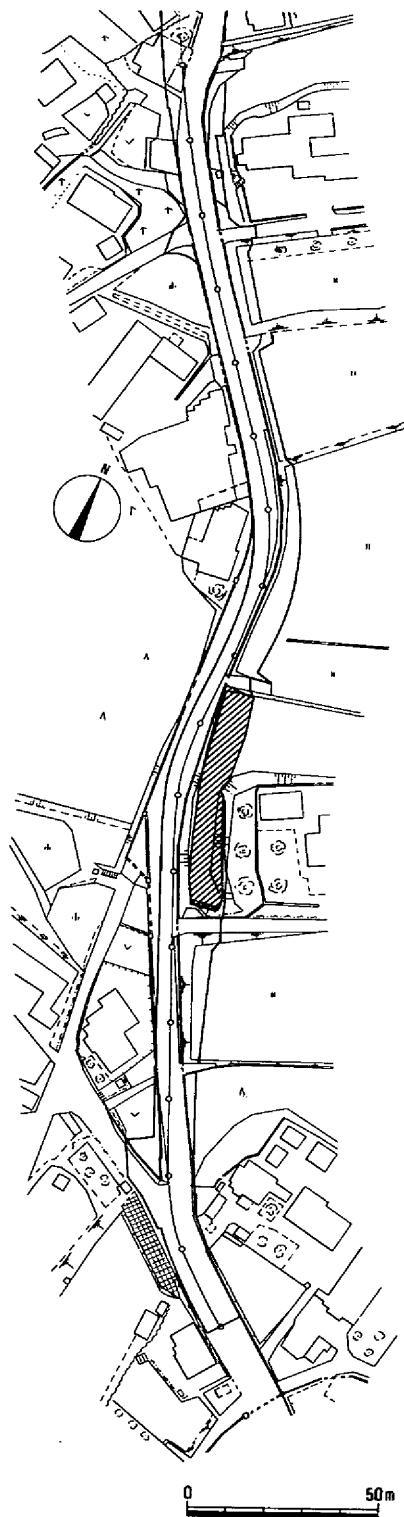
日誌抄

平成10年（一次調査）

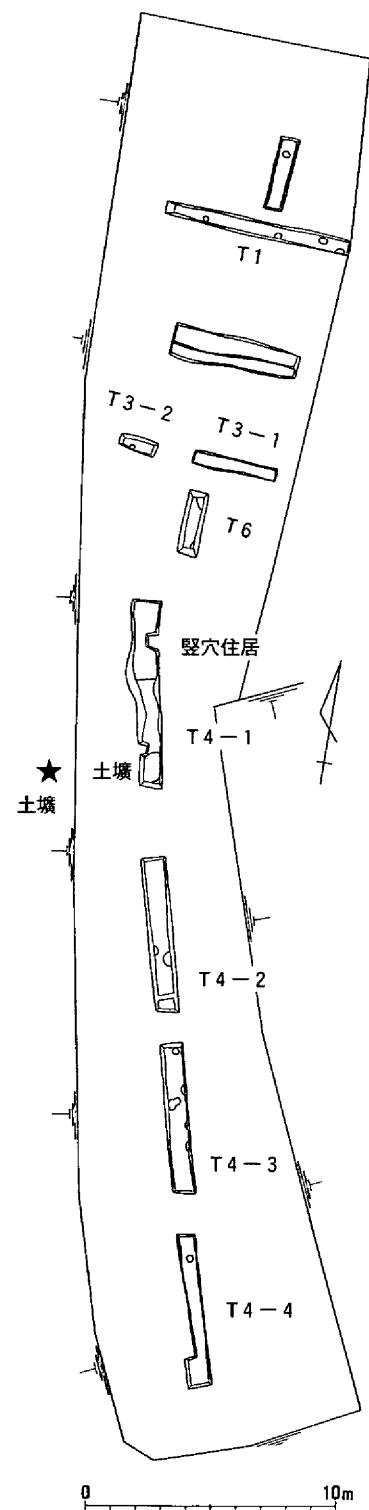
- 7月23日 調査開始・トレント掘削開始
- 7月24日 各トレント写真・実測開始
- 7月28日 道路側法面清掃開始
- 7月30日 埋め戻し
- 8月6日 調査終了

平成11年（本調査）

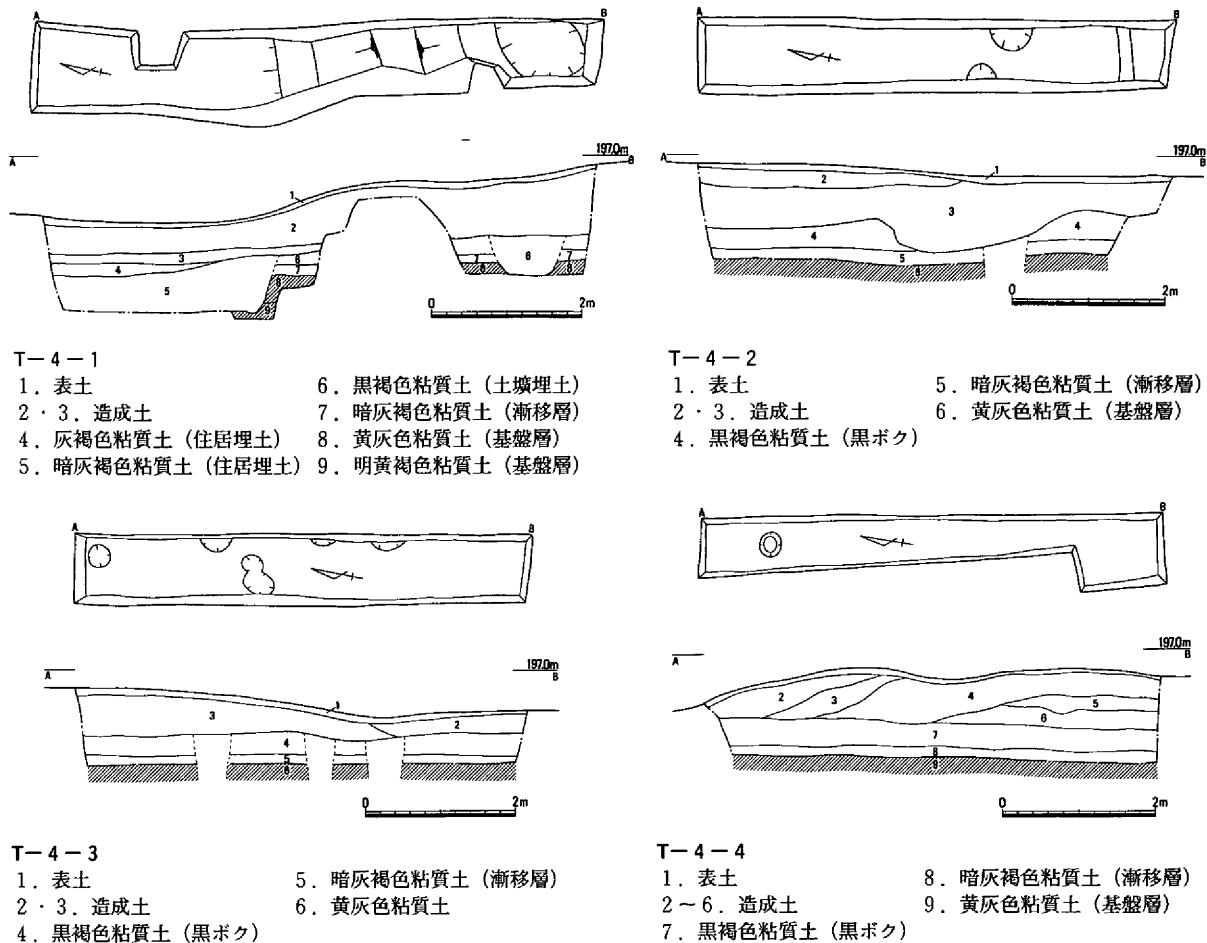
- 4月5日 調査開始・表土掘削
- 4月12日 黒ボク上面遺構検出
- 4月20日 黒ボク層除去開始・建物検出
- 5月17日 住居検出・土壙検出
- 5月20日 広戸小学校児童見学
- 6月1日 遺構掘り上げ・航空撮影
- 6月10日 勝北町民見学
- 6月11日 写真撮影・実測
- 6月14日 住居復元・危険防止のため埋め戻し
- 6月17日 阿波小学校児童見学・調査終了



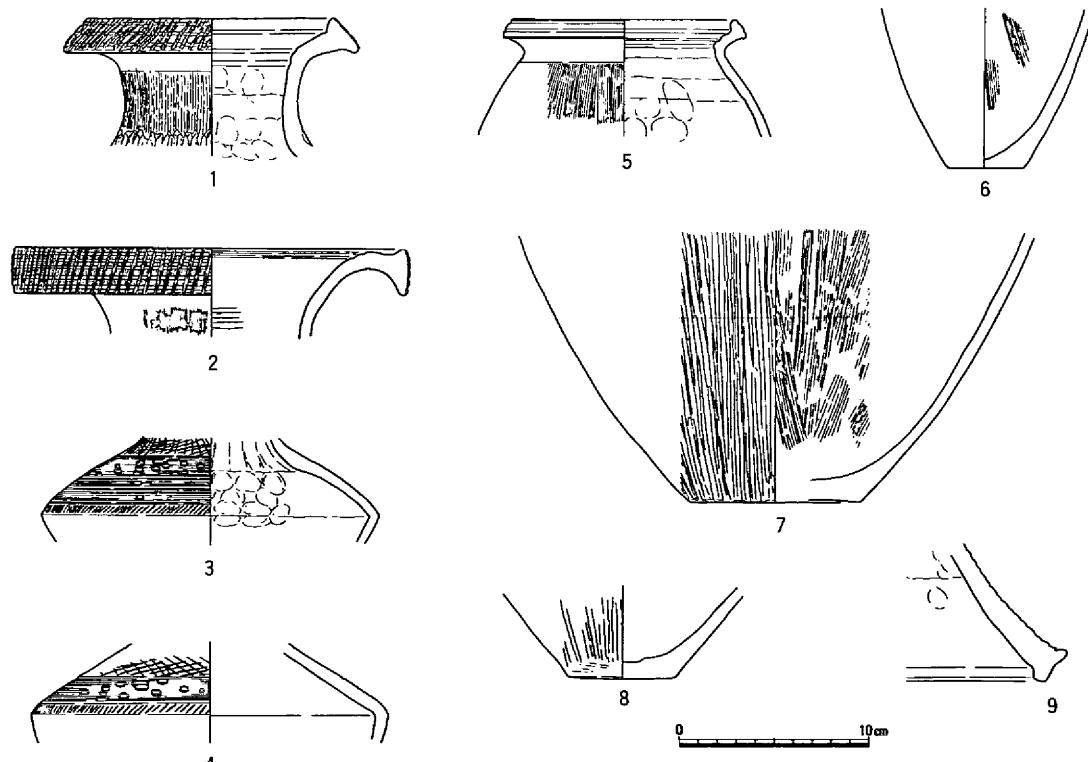
第3図 調査区位置図 (1/2,000)



第4図 トレンチ配置図 (1/300)



第5図 T-4-1～4 平・断面図 (1/100)



第6図 T-4-1 出土遺物

第3節 調査・報告書作成の体制

一次調査は岡山県教育委員会の依頼を受けて文化課職員と岡山県古代吉備文化財センター職員の2名で行なった。本調査はセンター職員1名で、報告書作成はセンターにおいてその職員が7月～8月に実施した。

平成10年度（一次調査）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

文化課長 高田 朋香

課長代理 西山 猛

参事 正岡 瞳夫

課長補佐(埋蔵文化財係長)

松本 和男

主事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

〈総務課〉

総務課長 小倉 昇

課長補佐（総務係長）

安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第一課〉

調査第一課長 高畠 知功

課長補佐（第一係長）

中野 雅美

文化財保護主任 大橋 雅也

文化財保護主事 岡本 泰典

平成11年度（本調査・報告書作成）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

文化課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

参事 正岡 瞳夫

課長補佐(埋蔵文化財係長)

松本 和男

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

〈総務課〉

総務課長 小倉 昇

課長補佐（総務係長）

安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第三課〉

調査第三課長 柳瀬 昭彦

課長補佐（第三係長）

浅倉 秀昭

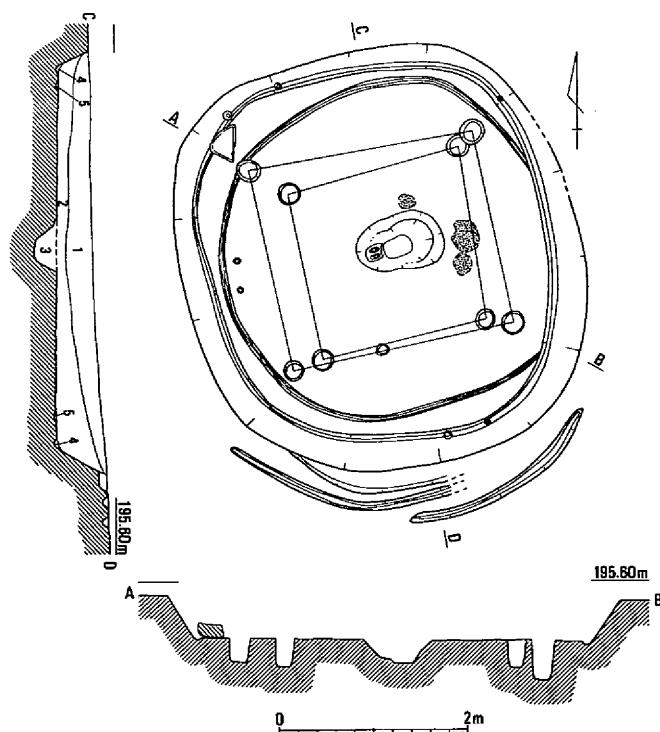
(註8) 岡本泰典ほか「山形福田遺跡」「岡山県内遺跡確認調査報告1」岡山県教育委員会 1999年

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺構・遺物の概要

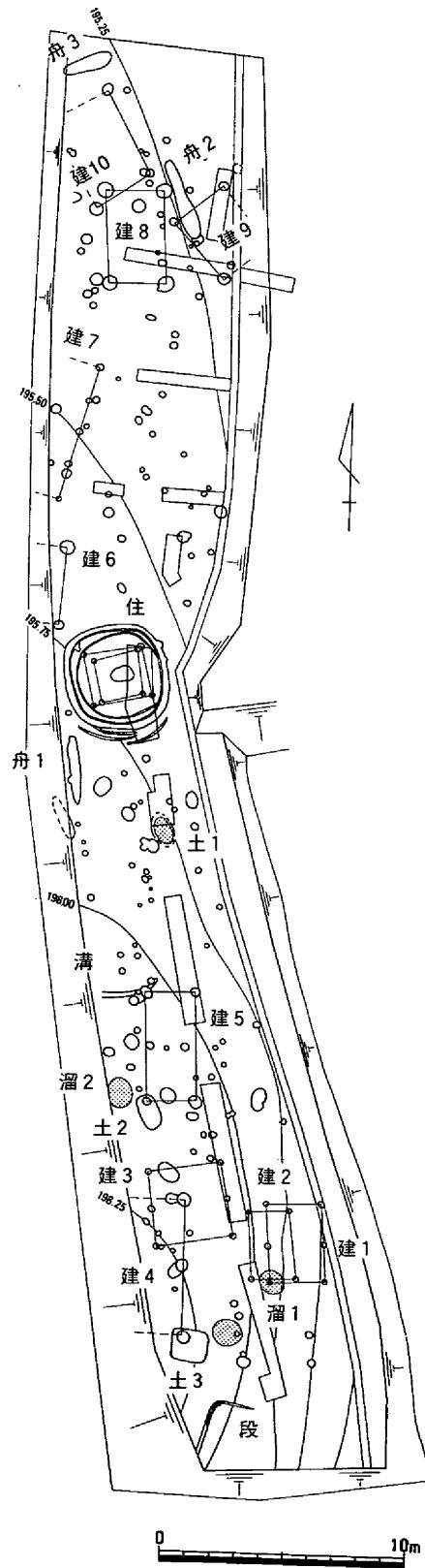
本調査区は長さ58m、幅平均9mの南北に細長い平面形をとる。検出できた遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・土壙・舟形土壙・土器溜りなどであり、遺構配置は中央に竪穴住居が占め、北部と南部に掘立柱建物が同数存在している。土壙と舟形土壙は、全域で検出できた。土器溜りとは、土器片を多少とも集中して採集できた場所を示す。

出土した遺物は、弥生土器5箱・石器4点・管玉1点・炭化した梅の種子1点である。土器が比較的多く出土した土壙1の資料は当地域における弥生中期の特色をとらえるうえで重要である。竪穴住居からは少量の土器片が出土したが、建物柱穴には土器を伴うものが少ない。



1:灰褐色粘質土(住居埋土)
2:暗灰褐色粘質土(住居埋土)
3:黒褐色粘質土(中央穴)
4:黒褐色粘質土(壁体溝)
5:灰褐色粘質土(下層住居壁体溝)

第8図 竪穴住居 (1/80)



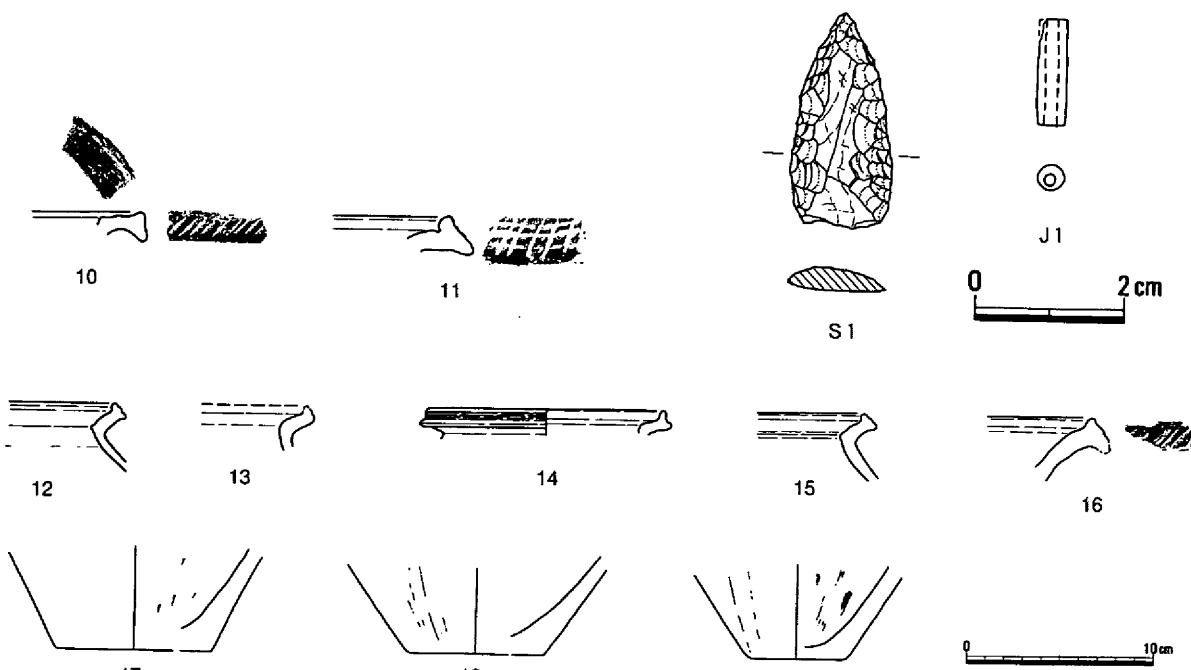
第7図 遺構全体図 (1/300)

第2節 竪穴住居

竪穴住居（第8図）

調査区中央部で検出した小形の竪穴住居である。一次調査のトレンチで断面と床面の一部を発掘していたものである。埋め戻していたトレンチを掘り上げ、断面を削っていたところ、床面から20cm上方で、緑色の管玉を発見した。したがって、発掘はきわめて慎重に削り取る方法で行った。住居は壁体溝の数だけ建替えがある。上段に3本、下段に2本の溝が検出されている。つまり、5軒の住居が重なっていることになる。中でも一番新しい住居が最も残存状態が良いことになる。その住居の平面形は、中膨らみの隅丸方形を呈する。主柱穴は4本で、中央穴も伴う。壁体溝の中に数本の杭痕跡が検出できた。棚の基礎杭あるいは出入り口の階段の位置を想定することができる。北西柱穴の奥に加茂川から採集して来たと考えられる漬物石大の平たい石を床面に置いて在った。住居跡に必ず1個ある調理台あるいは作業台と呼ばれる石である。久世町中原の旦山遺跡では眼下に流れる目木川原から採集していた。この住居の検出面での大きさは、東西420cm・南北437cm・深さ40cmを測る。床面の大きさは、ほぼ畳8帖敷分である。床面の中央穴周辺には3カ所の焼け跡がある。遺物は、弥生土器の小さな破片が少量出た他には調理台の横の床面から石鎌が1点とその近くで炭化した梅の種子が採集できた。土器片から推定するとこの最終住居が廃棄されたのは、弥生時代中期後葉のことである。

出土遺物について説明する。10は壺の口縁部小片で、端面にヘラキザミ・水平な上面に波状文を施している。11も口縁端面にヘラキザミのある壺小片である。12~15は小型の甕あるいは鉢の口縁部片であり、14は口径が測れた。16は壺である。17~19は壺あるいは甕の底部である。S1はサヌカイト製の打製石鎌で、形の上では平基式石鎌に属する。J1は緑色凝灰岩製の管玉で、長さ14.0mm・直径3.5mm・重さ0.14gを測る。中央部と端部に欠損したところがある。図版8には炭化した梅の種子を載せている。



第9図 竪穴住居出土遺物

第3節 掘立柱建物

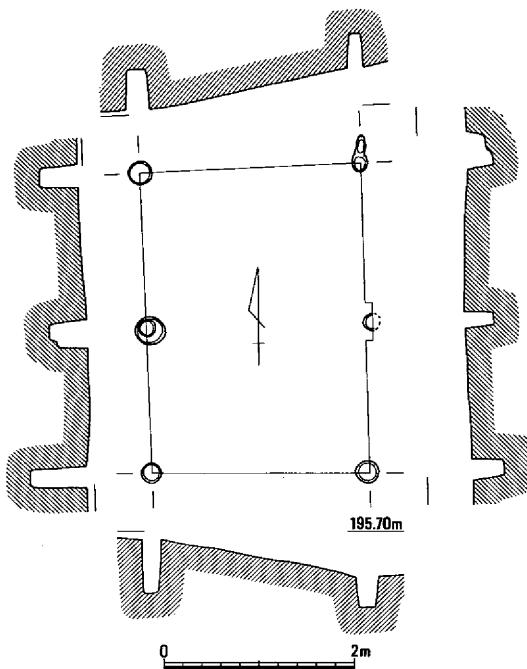
掘立柱建物1（第10図）

調査区の南部で検出した建物である。桁行2間×梁間1間の南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は30cm以下で、深さは最大30cmである。したがって柱は15cm以下の細いものを使っていたと考えられる。当然あまり背の高い建物ではない。

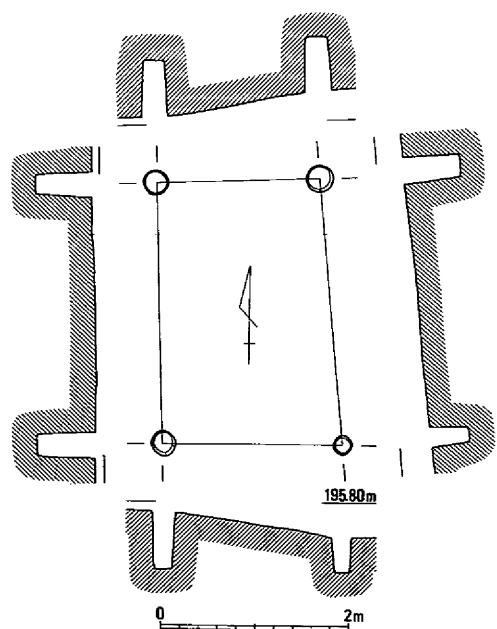
柱穴から遺物は弥生土器の破片が出ているので、この建物の時期は弥生時代であることが分かるが、遺構観察だけでは高床倉庫か住居かの判断はできない。竪穴住居が別にあるので状況的には高床倉庫と考えても差し支えなさそうである。

掘立柱建物2（第11図）

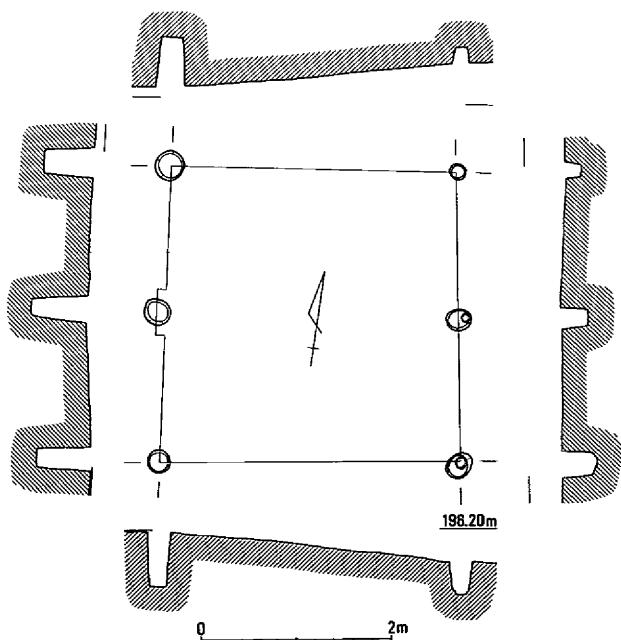
調査区の南部で検出した建物である。桁行1間×梁間1間だが南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は40cm以下で、深さは最大60cmである。建物1より背の高い建物であろう。南西隅の柱穴は1次調査のトレンチの中で半分掘り下げていた。柱穴から遺物は弥生土器の破片が出ているので、この建物の時期は弥生時代であることが分かり、建物1と同時には存在しないことも自明であろう。



第10図 掘立柱建物1 (1/80)



第11図 掘立柱建物2 (1/80)



第12図 掘立柱建物3 (1/80)

掘立柱建物 3 (第12図)

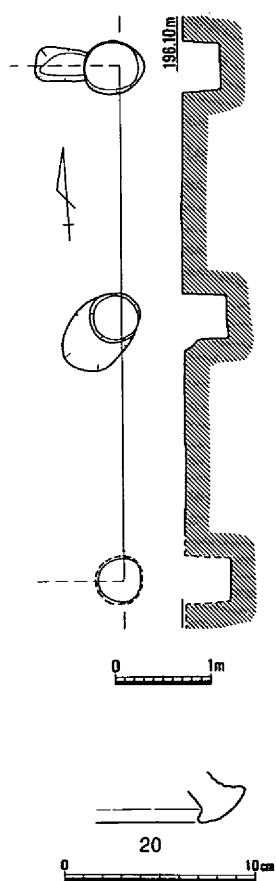
調査区の南部で検出した建物である。桁行2間×梁間1間で南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は40cm以下で、深さは最大50cmである。したがって柱は20cm以下のやや太いものを使っていたと考えられる。建物1より背の高い建物であろう。柱穴から遺物は出でていないが、土層観察からこの建物の時期は弥生時代であることが分かり、また建物1と同じように高床倉庫と考えられる。なお、建物1と同時には存在しても差し支えない。

掘立柱建物 4 (第13図)

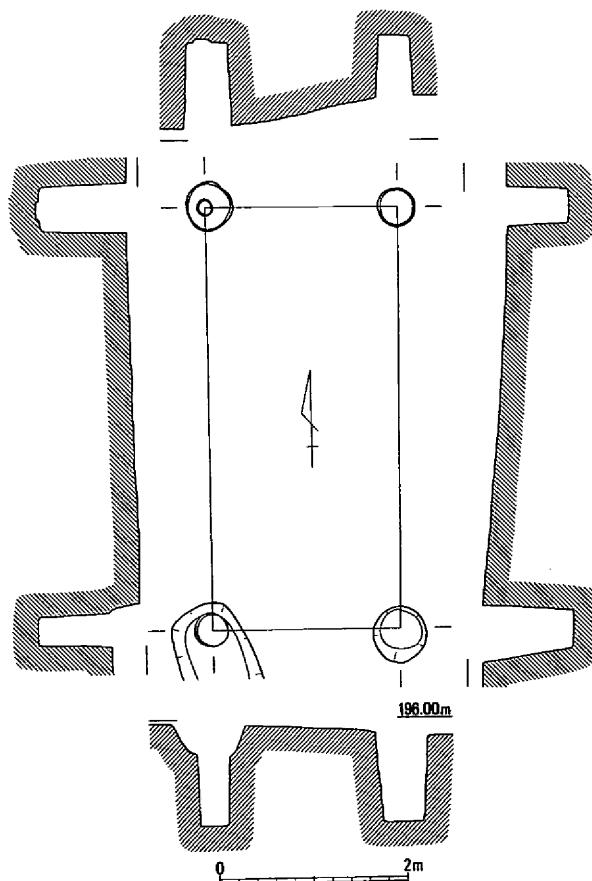
調査区の南部で検出した建物になる可能性の高い柱列である。桁行2間×梁間1間と推定される南北に長い長方形を呈するもの。柱穴の直径は50cm以上で、深さは最大40cmである。したがって柱は20cm以上のかなり太いものを使っていたと考えられる。建物3よりはるかに背の高い建物であろう。柱穴から遺物は出でていないが、土層観察からこの建物の時期は弥生時代であることが分かり、また建物3と同じように高床倉庫と考えられる。なお、建物3と同時には存在しない。

掘立柱建物 5 (第14図)

調査区の南部で検出した建物である。桁行1間×梁間1間で南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は60cm以上で、深さは最大80cmもある。柱痕の残存している柱穴があり、柱の直径は30cm近いかなり太いものを使っていたと考えられる。柱を埋める際に版築状に土を叩き締めているのが観察でき



第13図 掘立柱建物 4 (1/80)・出土遺物



第14図 掘立柱建物 5 (1/80)

た。建物4と同じかそれよりももっと背の高い堅固な建物を想定することができる。

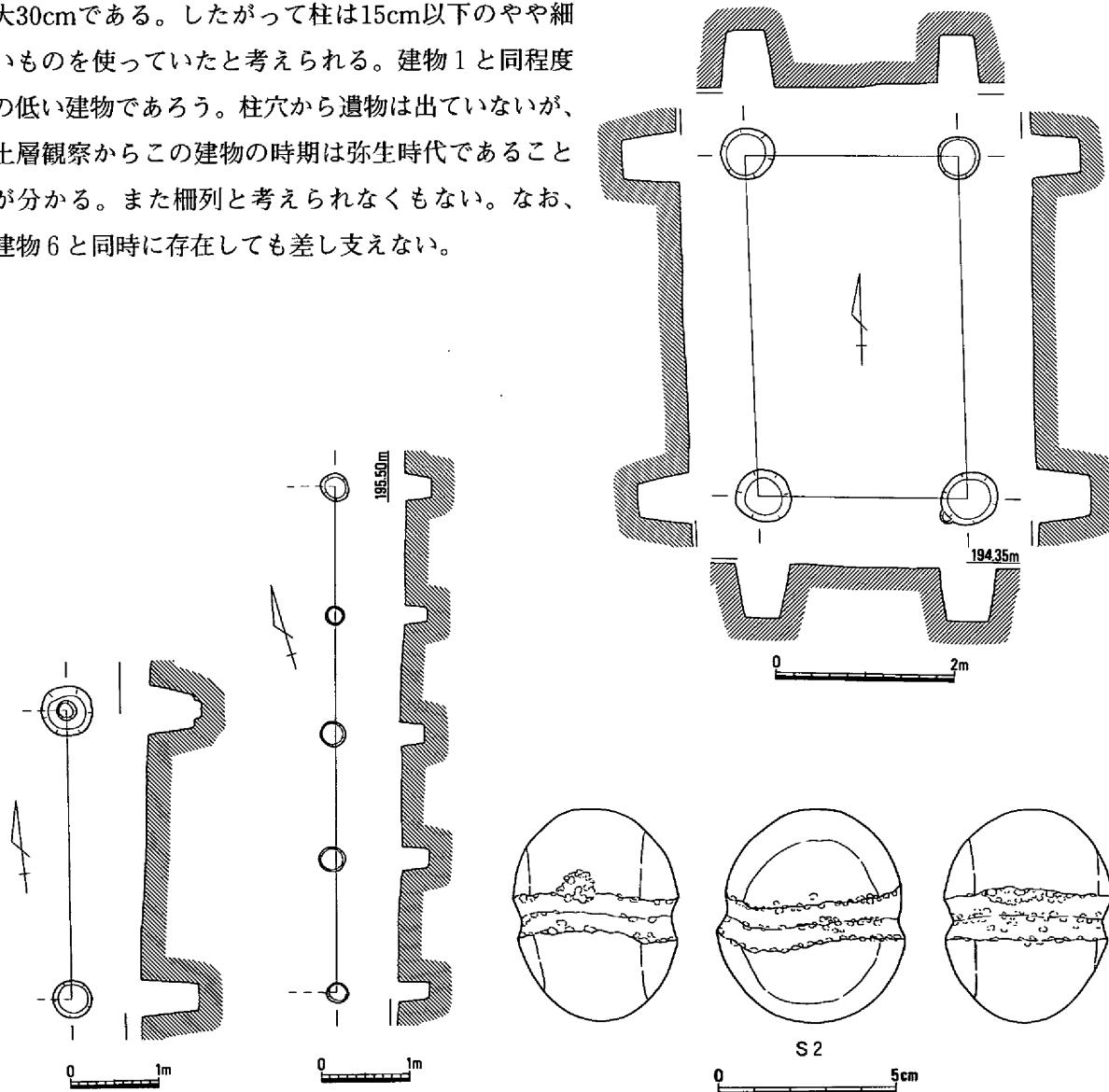
すべての柱穴から土器は出でていないが、この建物の時期は、土層観察から弥生時代であることが推定できる。なお、建物4と同時に存在しても差し支えないであろう。

掘立柱建物6（第15図）

調査区の中部で検出した建物になると推定できる柱列である。桁行1間×梁間1間で南北に長い長方形を呈するもの。柱穴の直径は50cm以上で、深さは最大50cmである。したがって柱は20cm以上のやや太いものを使っていたと考えられる。建物1より背の高い建物であろう。柱穴から遺物は出でていないが、土層観察からこの建物の時期は弥生時代であることが分かり、また建物1と同じように高床倉庫と考えられる。なお、竪穴住居と同時には存在しても差し支えない位置にある。

掘立柱建物7（第16図）

調査区の北部で検出した建物になると推定できる柱列である。桁行4間×梁間1間で南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は30cm以下で、深さは最大30cmである。したがって柱は15cm以下のやや細いものを使っていたと考えられる。建物1と同程度の低い建物であろう。柱穴から遺物は出でていないが、土層観察からこの建物の時期は弥生時代であることが分かる。また柵列と考えられなくもない。なお、建物6と同時に存在しても差し支えない。



第15図 掘立柱建物6 第16図 掘立柱建物7
(1/80) (1/80)

第17図 掘立柱建物8 (1/80) · 出土遺物

掘立柱建物8（第17図）

調査区の北部で検出した建物である。桁行1間×梁間1間で南北に長い長方形を呈する。柱穴の直径は70cm以上で、深さは最大50cmである。したがって柱は30cm以上のかなり太いものを使っていたと考えられる。建物7より背の高い建物であろう。北東隅の柱穴から石錘が出ている。S2は有溝石錘で、重さは192gを測る。これからこの建物の時期は弥生時代であることが分かり、また建物5と同じような高床倉庫と考えられる。なお、建物7と同時に存在しても差し支えない。

掘立柱建物9（第18図）

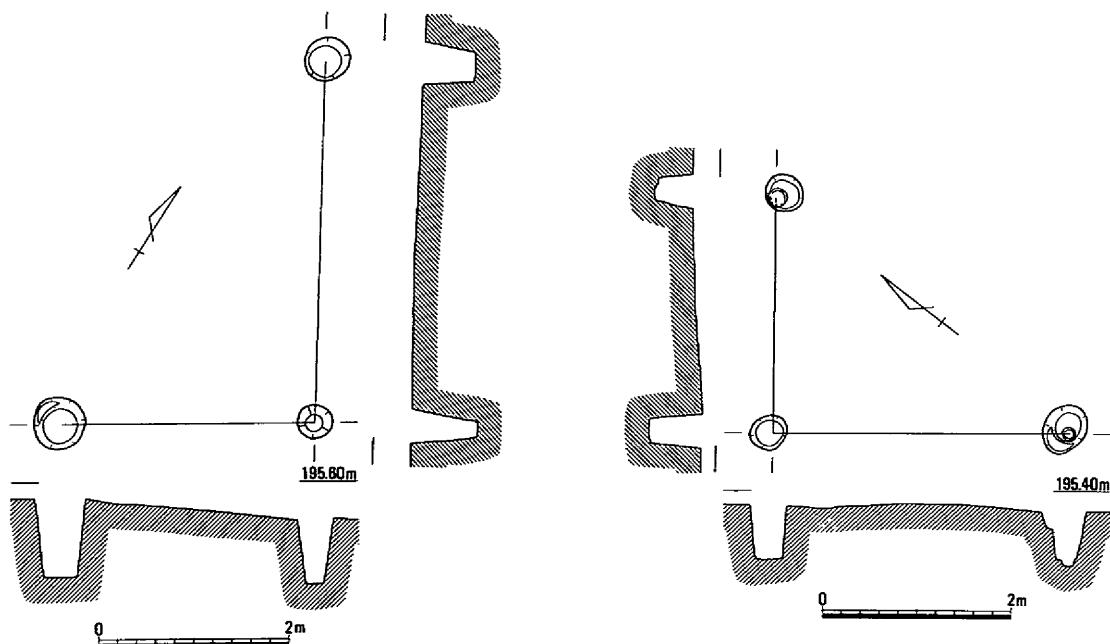
調査区の北部で検出した建物である。桁行1間×梁間1間で北北西から南南東に長い長方形を呈する。桁の方向はN-30°-Wを示す。柱穴の直径は40cm以下で、深さは最大50cmである。したがって柱は20cm以下の細いものを使っていたと考えられる。建物8より背の低い建物であろう。柱穴から何も出でていないが、この建物の時期は弥生時代であろう。また建物8と同じような高床倉庫と考えられる。なお、建物8と同時には存在しない。

掘立柱建物10（第19図）

調査区の北端部で検出した建物である。桁行1間×梁間1間で北北西から南南東に長い長方形を呈する。桁の方向はN-45°-Wを示す。柱穴の直径は50cm以上で、深さは最大50cmである。したがって柱は30cm以上のかなり太いものを使っていたと考えられる。建物8よりやや小ぶりの建物である。柱穴から何も出でないが、この建物の時期は弥生時代であろう。また建物8と同じような高床倉庫と考えられる。なお、建物9と同時に存在しても差し支えない。

その他の柱穴（第7図）

以上10棟の掘立柱建物のほかに多数の柱穴を検出しているが、建物にまとめることができそうなものは北東部に2組ある。この報告書では推定図を載せていない。将来東方の調査が行われがあればその時点できちんと作成できるはずである。



第18図 掘立柱建物9 (1/80)

第19図 掘立柱建物10 (1/80)

第4節 土 壤

土壌1 (第20・23・24図)

調査区中央部やや北で検出した土壌である。南北に長い楕円形の窪みとして検出できたが、土器を多数伴っていた。一次調査のトレンチで土器の一部が発見され、土壌として報告されていた。調査中は土器溜りとして認識していた。結果的に浅い楕円形土壌になったが、舟形土壌の深い所が残存しているものとも考えられる。土器は整理箱に1箱15kg程度出ている。

この土壌に伴う遺物としては土器だけである。実測できた土器の点数は28点である。内一次調査で報告済みの土器が9点ある。復元して完形品になったものも4点ある。21～30は壺であり、首の長いものとそうでないものがある。いずれも凹線文が施され、波状文・斜格子文・刺突文・円形浮文などで装飾している。31は小形の壺で、凹線文・斜格子文・刺突文でそろばん玉状の体部上半を飾っている。32・33は甕、34～36は鉢で、35には把手が付く。37～47は壺あるいは甕の底部である。48・49は器台で、凹線文・キザミメ・円形浮文で飾っている。

土壌2 (第21図)

調査区北部で検出した土壌である。南北に長い楕円形の窪みとして検出できた。掘立柱建物5の南西隅の柱穴と切り合う。土壌の方が新しいように見えたが、ヒノキの根が邪魔して十分な調査ができなかった。

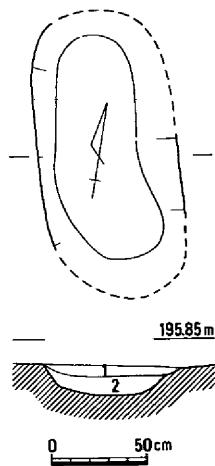
土器は小片しか出でていない。弥生中期の甕体部片である。

この土壌も舟形土壌の底部だけが残存したものであろうか。

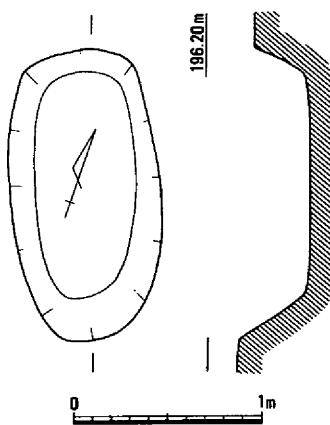
土壌3 (第22図)

調査区北部で検出した土壌である。ほぼ正方形の平面形を呈する。黒ボク層上面で検出できた唯一の遺構である。土層は5層に分割できた。土器は小片しか出でていない。しかしこの土壌に伴うか否か判定できない。周囲の黒ボク層中に弥生土器を包含するため、

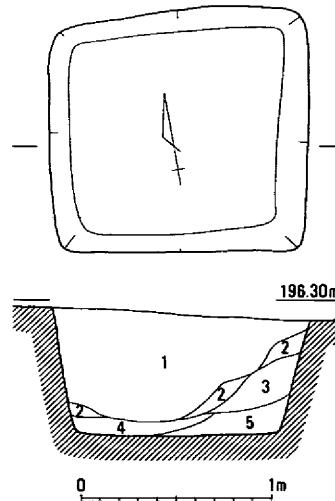
混入したものであろう。埋土の観察から見て、弥生時代ではなく近世に近い時代の遺構と考えられる。



第20図 土壌1 (1/40)

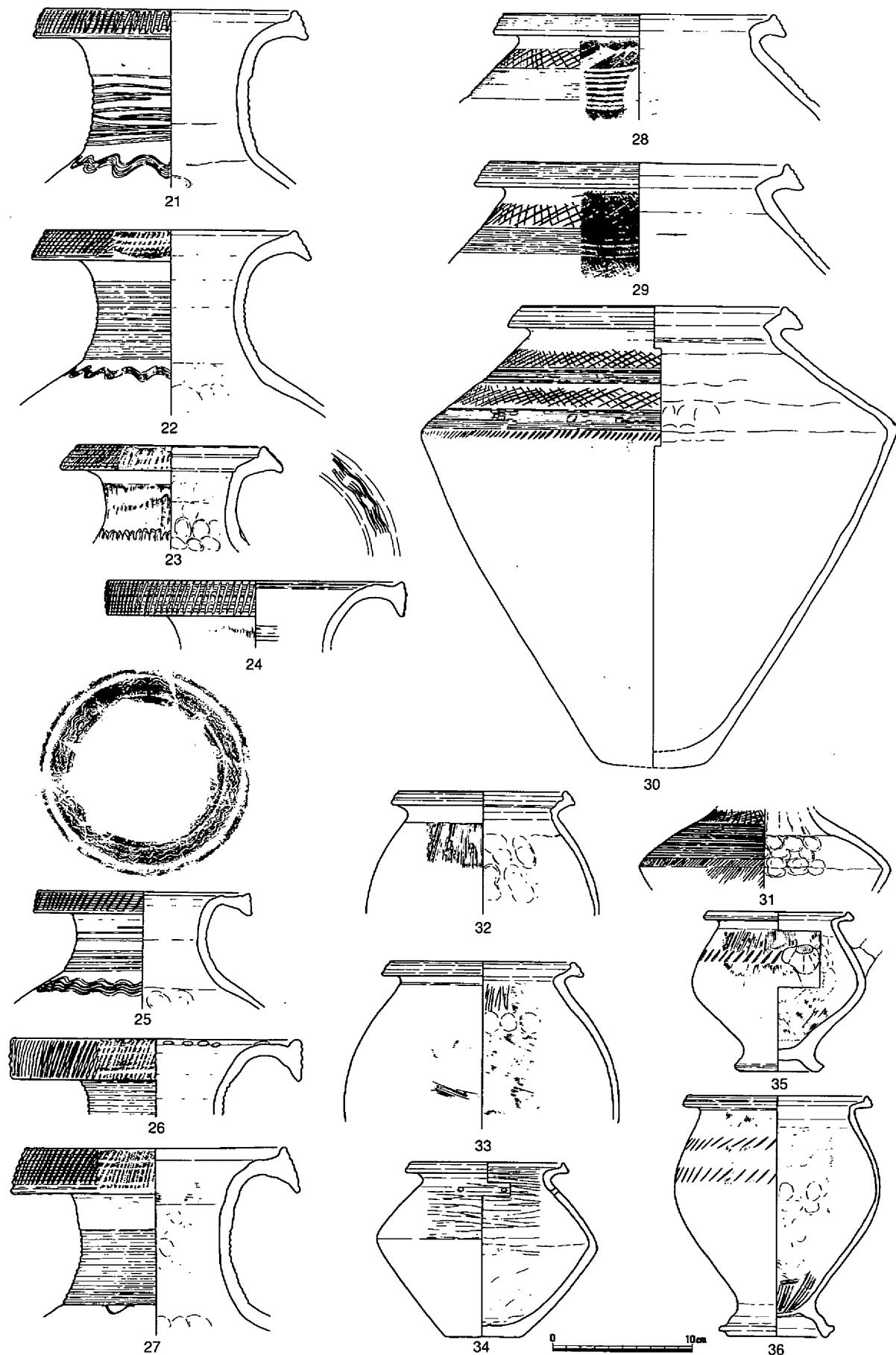


第21図 土壌2 (1/40)

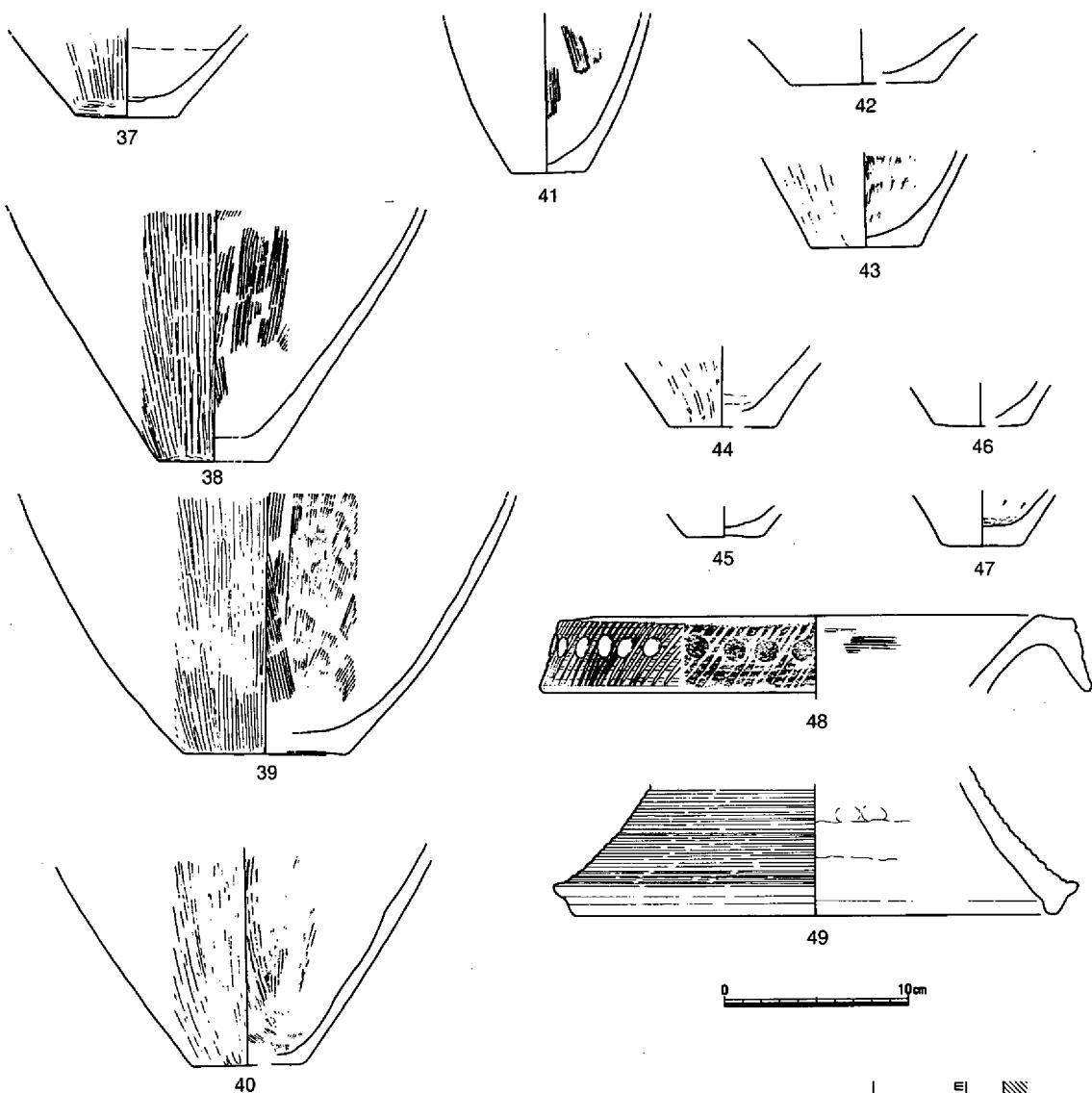


1. 黒黄褐色土	4. 黑褐色土
2. 黄褐色土	5. 灰褐色土
3. 黑褐色土	

第22図 土壌3 (1/40)



第23図 土壌1 出土遺物①



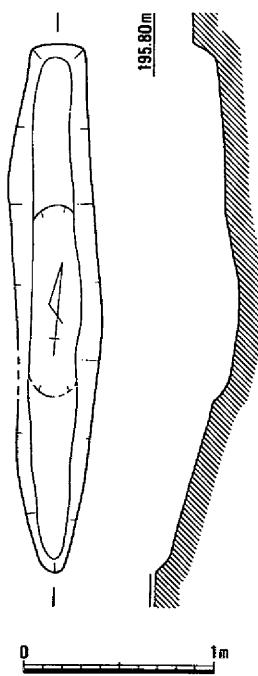
第24図 土壌1出土遺物②

舟形土壌1（第25図）

調査区中央部北部で検出した舟形土壌である。南北に長く、また中央部は横の壁が袋状に成っていて、まさに丸木舟形の窪みとして検出できた。竪穴住居の南西に約30cmほど離れて位置する。同時に存在しても支障はない。長さは279cm、幅は中央部が最も広く35cmで、底部中央部が一段深くなり、もっとも深いところで遺構検出面から30cmを測る。また、図示していないが底面に数本の杭痕跡が発見できた。覆い屋根をしていたものであろう。土器は小片しか出でていない。弥生土器と判別できる程度のものである。

舟形土壌2（第26図）

調査区北部で検出した舟形土壌である。南北に長く、また底部は中央が深く、船底形のV字形溝として検出できた。掘立柱建物8の東側に約100cmほど離れて位置し、同時に存在しても支障はな

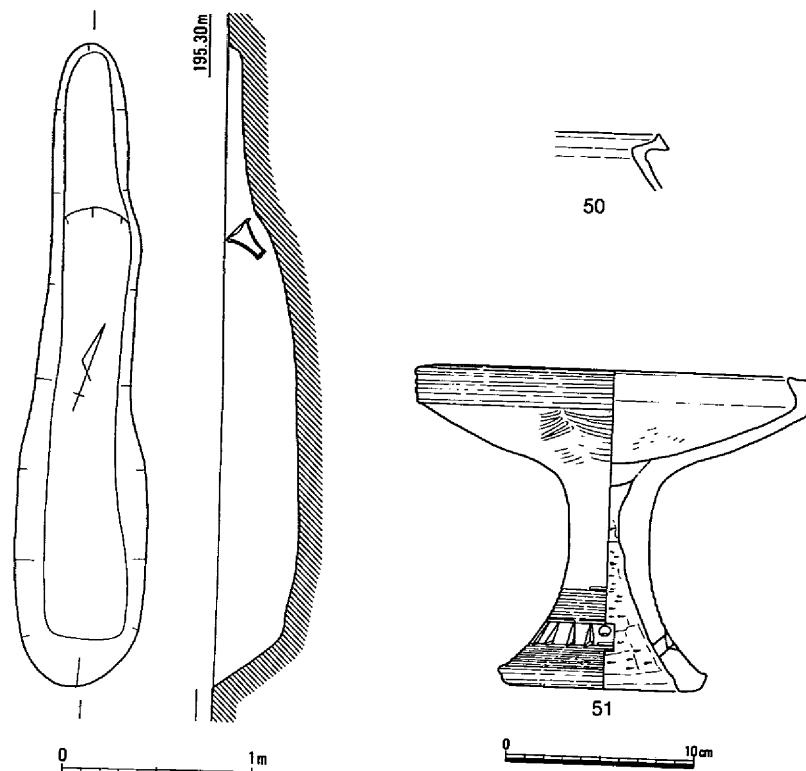


第25図 舟形土壌1 (1/40)

い。長さは343cm、幅は中央部が最も広く60cmで、深さは底部中央部がもっとも深く40cmを測る。底面に数本の杭痕跡が発見できた。土器は高杯51が出土し、復元して完形品となった。

舟形土壙 3 (第27図)

調査区北西端部で検出した舟形土壙である。東西に長軸をもつ。また中央部は深くなっていて、例えるとてんま舟形を呈する。長さは210cm、最大幅は55cmで、深さは30cmを測る。底面に数本の杭痕跡が発見できた。土器は出ていない。



第26図 舟形土壙 2 (1/40) · 出土遺物

第5節 その他の遺構・遺物

段状遺構 (第28図)

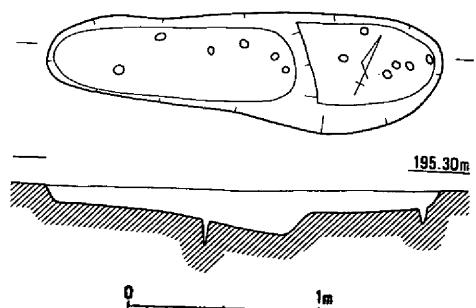
調査区最南端で検出した段状遺構である。「く」の字状に段状の平坦面を検出し、西側の地形がやや高い部分には壁体溝が認められた。「く」の字に囲まれた部分は床面が水平に近い。柱穴は認められなかった。土器は若干量採集できた。竪穴住居とは言いがたいが、住居跡と考えても良い。

溝状遺構 (第29図)

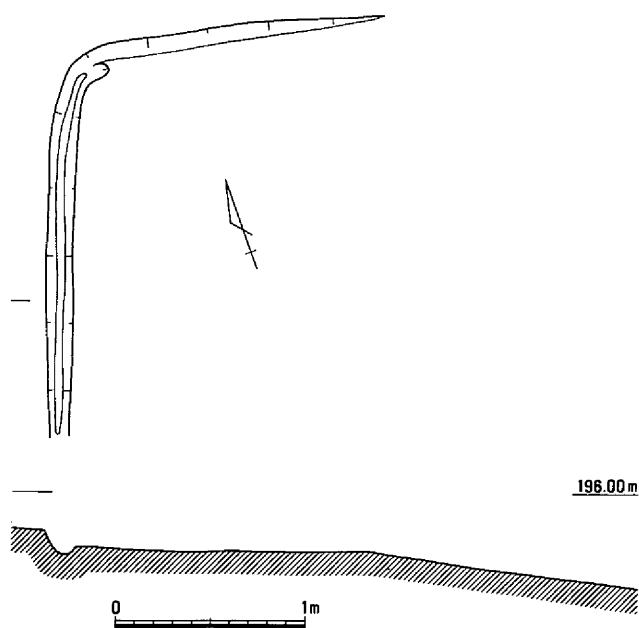
調査区中央部で、掘立柱建物5の北西端で重複する溝状遺構である。建物柱穴の方が切っているように見えた。「し」の字状に残存している溝は深さ5cm、幅10cmで、竪穴住居の壁体溝と考えられる。これに伴う柱穴はありそうだが特定できない。遺物は、黒ボク層出土遺物として取り上げた土器の中にある。

土器溜り 1 (第30図)

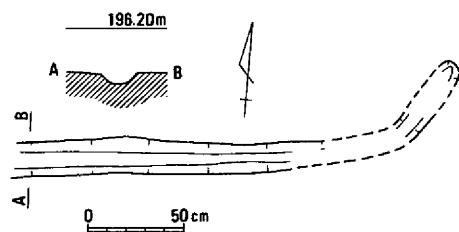
調査区南部で見つけた土器溜りである。長さ500cm・幅100cmの東西に長い範囲で土器と石包丁が採



第27図 舟形土壙 3 (1/40)



第28図 段状遺構 (1/40)

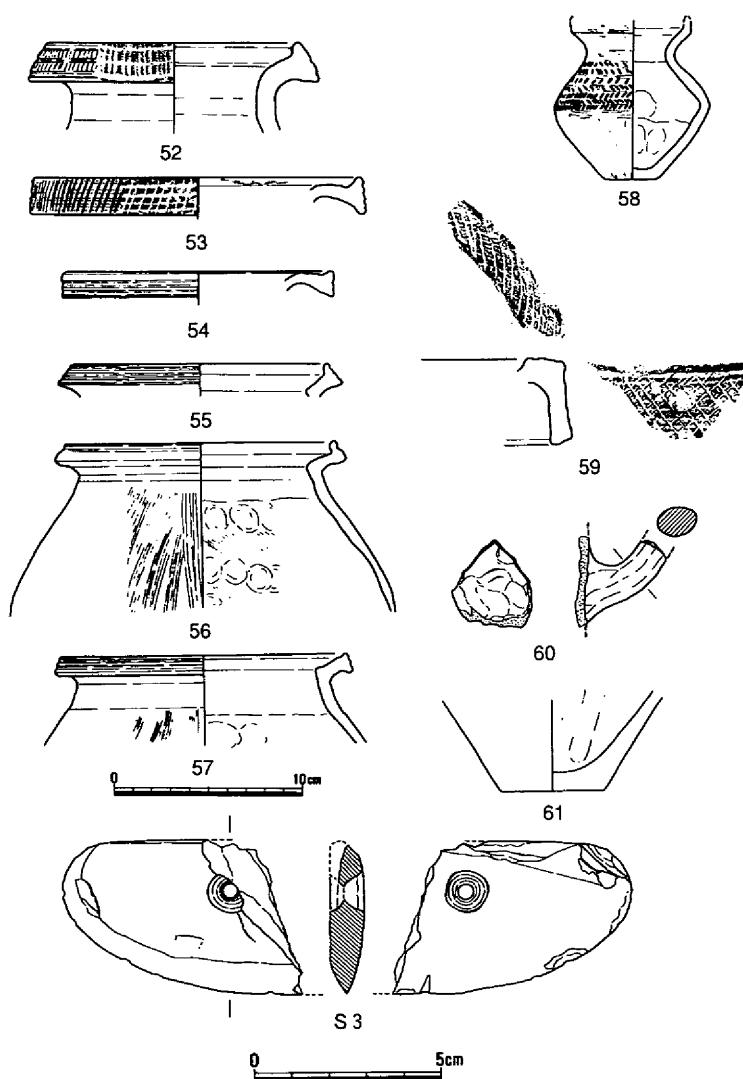


第29図 溝状遺構 (1/40)

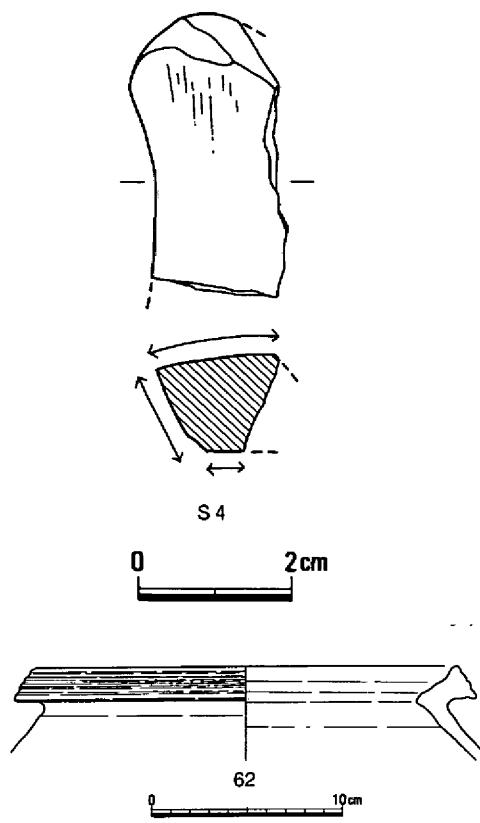
集できた。土器は弥生中期後葉の壺などで、石包丁は緑色片岩製の良く磨かれたもので、ちょうど半分に折れて残存していた。52～54は壺の口縁部で、52・53の肥厚した端面には凹線文が施され、その後ヘラによるキザミメがなされている。55～57は甕の口縁部～体部上半部である。56の体部内外面ともにハケメ調整が見られる。58は小形の壺で、体部上半部には綾杉状に連続刺突文を7段施し、飾っている。59は器台の口縁部小片であるが、端面外面と上面に斜格子文が施され、円形浮文の剥がれ落ちた跡もみとめられる。60は台付き鉢に付く把手である。61は壺あるいは甕の底部である。S3は石包丁である。

土器溜り2（第31図）

調査区中央部南部で見つけた土器溜りである。長さ120cm・幅100cmの南北に長い範囲で土器と砥石が採集できた。土器は弥生中期後葉の壺などで、砥石は流紋岩製で、きわめて小さく、長さ37.5mm・重さ10.0gを測る。62は中形甕の口縁部である。凹線文をもつ。S4は小形砥石である。3面の使用が認められる。



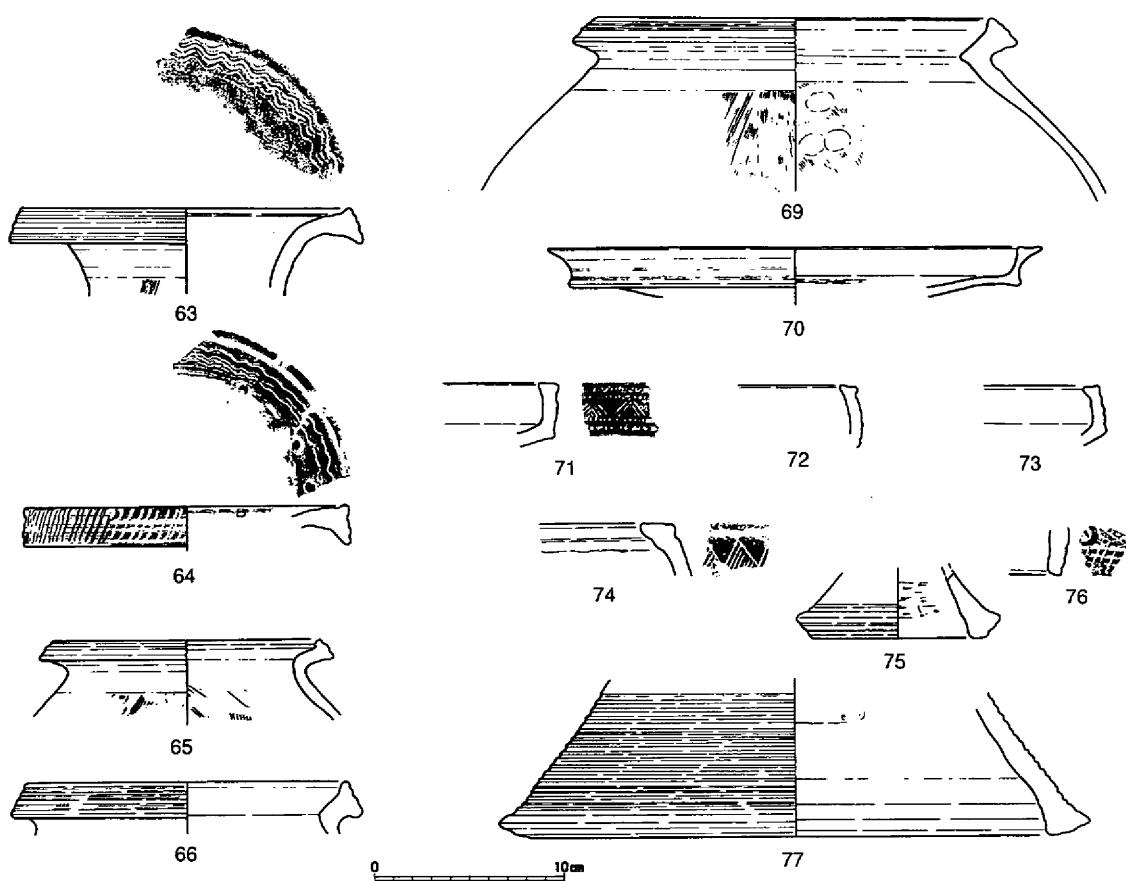
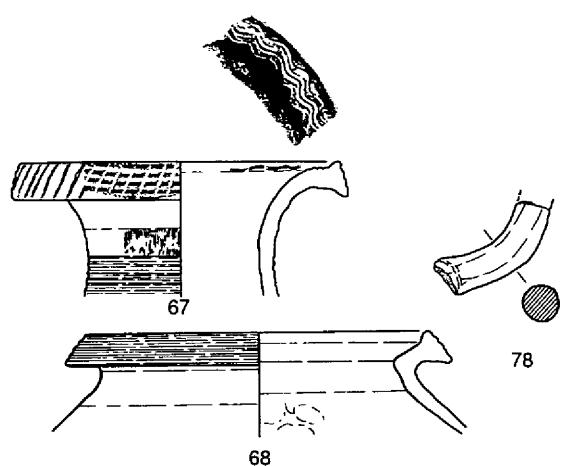
第30図 土器溜り1出土遺物



第31図 土器溜り2出土遺物

遺構に伴わない遺物（第32図）

黒ボク層およびその上面で採集でき、遺構に伴わなかった土器でも実測に耐えるものが多数あった。ここにはその内63～78の16点を掲載した。長頸壺・壺・甕・高杯・器台が含まれる。土器観察表の79～106は実測をしているが、本報告書には掲載していない土器片である。ほとんど甕あるいは壺の底部である。



第32図 黒ボク層出土遺物

第4章 まとめ

本遺跡調査のまとめを若干記述しておきたい。

まず遺構についていえば、竪穴住居は平面形が隅丸方形ないし円形を呈し、壁体溝の数から5軒の住居が重複していることが判明した。その中でもっとも新しい住居Aと2番目の住居Bは、それぞれ主柱穴4本と中央穴を検出している。他の3軒は壁体溝の一部しか検出できなかった。前の2軒と後の3軒は床面の高さに30cmほどの差がある。このため主柱穴などが削平されたものであろう。また、Aの床面には赤く酸化焼成した普通火所と言われる炉跡が3カ所見られた。隅丸方形住居Aは円形住居Bと同じ床面で9.6m²から13m²に拡張している。3.4m²すなわち約一坪の拡張は、居住者一人分の必要面積を示しているのであろうか。その他に段状遺構・溝状遺構も住居跡と考えることが可能であるため、本発掘調査では合計7軒の住居を検出したことになる。

掘立柱建物は、10棟を報告しているが、まだ他に2棟が推定できる。掘立柱建物1と掘立柱建物2は、2間ないし1間の桁行に1間の梁間をもつ。1の桁行1間も2の桁行2間も長さではあまり相違がない。つまり、ほぼ同規模の建物で、同時に存在できないので建替えであろう。掘立柱建物5・8の柱穴の掘り方はかなり大きく直径80cmを測り、その上深さは80cmもある。高床倉庫と考えられるが、大形の建物が想定できる。この調査区で検出された1辺が4m程度の前述の小形竪穴住居に伴う建物と考えるには釣り合いが取れないよう思われる。現調査区の外に相応の大形竪穴住居が存在すると考えた方が良いであろう。すでに道路敷きになっている部分に存在した可能性が高い。

土壙については、小判形3基と舟形3基の合計6基を検出している。前者については後者の深い部分のみが残ったと考えることもできる。6基の土壙の性格・用途については貯蔵穴あるいはごみ穴または墓と考えられる。舟形土壙は普通墓と推定されているが、本遺跡の場合その可能性は少ないのであろう。その理由としては、この土壙の床面に数本の杭痕跡が認められることからである。

次いで遺物について触れると、遺構出土あるいは遺構に伴わない遺物を合わせて弥生時代中期後葉(註9)の土器が整理箱に換算して6箱となった。土壙1出土の土器は数点が完形品に復元できたばかりでなく、この一括資料は従前にこの付近で発掘例が見られないだけに、当地域における弥生時代中期土器の特徴をとらえるうえで重要である。30の壺は本遺跡中最大で、口径18.5cm・底径7.3cm・器高33.0cmを測り、凹線文と斜格子文で飾っている。35の鉢は「U」字形の把手をもち、津山市沼遺跡G住居出土鉢形土器に類似している。48の器台は、津山市一貫西遺跡出土のものと似ている(註10)。51の高杯は舟形土壙2から出土し、津山市西吉田遺跡出土のものと脚が似ている(註11)。このように、津山文化圏の影響が色濃く反映されている。石器としては、石包丁・砥石・石錘・石鎌が出土している。管玉と炭化した梅の種は竪穴住居から出土したものである。

最後に若干の特長について述べる。500m²の狭い範囲の発掘調査では遺跡全体の正確な大きさや性格の推定は困難であるが、あえて周辺の同時代の遺跡と比較検討して結びたい。まず竪穴住居と掘立柱建物のセットで検出した遺跡には、東隣町の勝田郡奈義町中島東所在の野田遺跡を挙げができる。この遺跡は遺構のセットも興味深いものがあるが、遺物として石包丁と紡錘車を多数出土しており、県北に存在する弥生時代中期における集落遺跡の標準的農工具の組み合わせの一端を見ることができる。しかし、本遺跡からは、調査範囲が狭かったためか、紡錘車は発見されていない。また、

南東隣町勝田郡勝央町岡所在の小中遺跡(註12)は県下最大級の竪穴住居群と掘立柱建物と貯蔵穴がセットで検出され、遺物としては鉄器・ガラス玉を出土している。この遺跡は弥生時代中期から始まっているが、中心となっているのは後期である。竪穴住居と貯蔵穴がセットで見つかっている遺跡は、津山市内には多数あり、後期の大田十二社遺跡もその一つである(註13)。真庭郡久世町中原所在の旦山遺跡(註14)は、やや地理的に離れているが、時期は弥生時代中期に始まり後期後半まで存続していた。そして、土壙は長方形土壙が古く、円形土壙がやや新しいと考えられている。本遺跡からは、典型的な袋状土壙は一基も見出されておらず、住居址との関係がもう一つはっきりしない。これに対して異常なまでに掘立柱建物が多いのは、あるいはこの中のいくつかが倉庫のような機能をもっていたのではないかと考えられる。

本遺跡の調査に際して、地域住民が遺跡を視覚的に把握できるよう竪穴住居の復元を試み、埋蔵文化財の普及・啓蒙活動を行なった。(註15)

最後に、発掘調査から報告書作成までお世話になった作業員の皆様・岡山県勝英地方振興局建設部・勝北町役場・勝北町教育委員会・勝北町文化財保護委員会の各位には謝意を表すとともに、今後とも埋蔵文化財の保護・保存に御協力いただければ幸いである。

(註9) 中山俊紀「津山の弥生土器3」「年報津山弥生の里第6号」津山弥生の里文化財センター 1999年

(註10) 行田裕美「一貫西遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告33」津山市教育委員会 1990年

(註11) 坂本心平ほか「西吉田遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告58」津山市教育委員会 1997年

(註12) 浅倉秀昭ほか「小中遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117」岡山県教育委員会 1997年

(註13) 浅倉秀昭ほか「旦山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136」岡山県教育委員会 1999年

(註14) 中山俊紀ほか「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告10」津山市教育委員会 1981年

(註15) 「所報告備第27号」岡山県古代吉備文化財センター 1999年

平成11年度岡山県古代吉備文化財センター ホームページ参照

第1表 遺構一覧表

新遺構名	旧遺構名	規模(長さ×幅)	遺物	備考	時期
竪穴住居	No.4 竪穴住居	450cm×430cm	土器・管玉・石鐵・梅種子	5軒重複	弥生中期
掘立柱建物1	No.11建物	2間×1間			弥生中期
掘立柱建物2	No.12建物	1間×1間			弥生中期
掘立柱建物3	No.13建物	2間×1間			弥生中期
掘立柱建物4	No.14建物	2間×1間		大形柱穴	弥生中期
掘立柱建物5	No.15建物	1間×1間		大形柱穴・深い	弥生中期
掘立柱建物6	No.21建物	1間×1間		大形柱穴	弥生中期
掘立柱建物7	No.20建物	4間×1間		柵列?	弥生中期
掘立柱建物8	No.19建物	1間×1間	石錘	大形柱穴・深い	弥生中期
掘立柱建物9	No.24建物	1間×1間			弥生中期
掘立柱建物10	No.23建物	1間×1間			弥生中期
土壙1	No.3 土壙	155cm×75cm	土器多数		弥生中期
土壙2	No.9 土壙	150cm×80cm			弥生中期
舟形土壙1	No.16舟形土壙	280cm×45cm		杭痕跡	弥生中期
舟形土壙2	No.18舟形土壙	340cm×70cm	高杯	杭痕跡	弥生中期
舟形土壙3	No.22舟形土壙	210cm×65cm		杭痕跡	弥生中期
段状遺構	No.10段状遺構	220cm×170cm		壁体溝あり	弥生中期
溝状遺構	No.17溝	250cm×20cm		壁体溝?	弥生中期
土器溜り1	No.2 土器溜り	500cm×100cm	土器・石包丁	2ヵ所に分離	弥生中期
土器溜り2	No.5 土器溜り	120cm×100cm	土器・砥石		弥生中期
土壙3	No.1 土壙	135cm×130cm			時期不明

第2表 土器観察表

掲載番号	実測番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	岡山県内遺跡確認調査報告1
						口径	底径	器高		
10	36	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				波状文・キザミメ	
11	41	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				凹線文・キザミメ	
12	46	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				凹線文	
13	47	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				煤付着	
14	48	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺	12.2			被熱	
15	49	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				煤付着	
16	50	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺				被熱	
17	88	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺		8.2			
18	89	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺		8.2		ヘラミガキ	
19	90	豎穴住居	No.4 豊穴住居	弥生土器	壺		5.3			
20	52	掘立柱建物 4	No.14掘立柱建物	弥生土器	器台				被熱・丹塗り	
21	24	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	長頸壺	17.4			波状文・凹線文	
22	25	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	長頸壺	17.4			波状文・凹線文	
23	1	土壙 1	T-4-1	弥生土器	壺	12.9			頸部内面煤付着	第12図-1
24	2	土壙 1	T-4-1	弥生土器	壺	20.3			キザミメ	第12図-2
25	29	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	長頸壺	14.8			内面波状文・キザミメ	
26	26	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	長頸壺	19.8			キザミメ・円形浮文	
27	30	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	長頸壺	18.0			波状文・キザミメ	
28	22	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	壺	19.0			斜格子文・凹線文	
29	23	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	壺	21.0			斜格子文・凹線文	
30	14	土壙 1	T-4-1	弥生土器	壺	18.5	7.3	33.0	斜格子文・刺突文	第12図-4
31	13	土壙 1	T-4-1	弥生土器	壺				斜格子文・刺突文	第12図-3
32	15	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕	11.7			煤付着	第12図-5
33	18	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕	12.8			煤付着	
34	16	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	鉢	10.7	5.4	12.4	肩部円孔	
35	17	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	鉢	10.0	5.4	11.4	把手・台付き	
36	19	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	鉢	12.7	7.0	16.6	被熱	
37	9	土壙 1	T-4-1	弥生土器	壺		5.6		ヘラミガキ	第12図-8
38	11	土壙 1	T-4-1	弥生土器	甕		6.1		煤付着	
39	12	土壙 1	T-4-1	弥生土器	甕		8.9		黒斑	第12図-7
40	59	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	壺		8.2		煤付着・ヘラミガキ	
41	10	土壙 1	T-4-1	弥生土器	甕		4.0		ハケメ	第12図-6
42	57	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	壺		8.0			
43	58	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕		6.0		煤付着	
44	65	土壙 1	T-4-1	弥生土器	甕		6.0		煤付着	
45	54	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕		4.4		煤・炭化物付着	
46	55	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕		5.0		被熱	
47	56	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	甕		4.0		煤付着	
48	21	土壙 1	No.3 土壙	弥生土器	器台	24.0			キザミメ・円形浮文	
49	8	土壙 1	T-4-1	弥生土器	器台		26.0		18条凹線	第12図-9
50	53	舟形土壙 2	No.18舟形土壙	弥生土器	甕				煤付着	
51	27	舟形土壙 2	No.18土壙	弥生土器	高杯	18.0	9.0	17.0	完形品に復元	
52	39	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	壺	13.2			凹線文・キザミメ	
53	38	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	壺				内面波状文・キザミメ	
54	37	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	壺	14.0			内面波状文	
55	43	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	甕	13.4			凹線文	
56	44	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	甕	14.0			煤付着	
57	45	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	甕	15.0			凹線文	
58	28	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	小形壺	6.0	2.8	8.7	丹塗り・刺突文	
59	35	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	器台				斜格子文・円形浮文	
60	62	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	壺				把手	
61	91	土器溜り 1	No.2 土器溜り	弥生土器	甕	5.6			煤付着	
62	51	土器溜り 2	No.2 土器溜り	弥生土器	甕	22.0			凹線文	
63	5	黒ボク 1	黒ボク上面	弥生土器	壺	17.0			口縁部内面波状文	
64	40	黒ボク 1	黒ボク層	弥生土器	壺	16.0			内面波状文・キザミメ	
65	4	黒ボク 1	黒ボク上面	弥生土器	甕	14.0			2条凹線	
66	42	黒ボク 1	黒ボク上面	弥生土器	壺	16.6			凹線文	

掲載番号	実測番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	岡山県内遺跡確認調査報告
						口径	底径	器高		
67	60	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	壺	16.7			キザミメ・波状文	
68	84	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	18.0			凹線文	
69	6	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	20.8			黒斑	
70	20	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯	23.6			ヘラミガキ	
71	3	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯				鋸齒文	
72	32	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯				4条凹線	
73	31	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯				6条凹線	
74	33	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯				鋸齒文	
75	63	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	高杯		9.0		三角形透かし孔	
76	34	黒ボク	黒ボク層	弥生土器	器台				斜格子文・円形浮文	
77	7	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	器台		27.6		7条凹線	
78	61	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	壺				把手	
79	64	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	壺					
80	66	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	14.0				
81	67	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕					
82	68	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
83	69	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
84	70	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
85	71	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	12.0			煤付着	
86	72	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
87	73	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
88	74	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
89	75	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
90	76	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕					
91	77	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
92	78	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
93	79	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
94	80	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	11.4			煤付着	
95	81	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕					
96	82	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
97	83	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				煤付着	
98	85	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕					
99	86	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕				凹線文	
100	87	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕	13.4			凹線文	
101	92	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		8.0			
102	93	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		6.0		煤付着	
103	94	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		6.5			
104	95	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		6.5		被熱	
105	96	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		4.8		煤付着	
106	97	黒ボク	黒ボク上面	弥生土器	甕		8.5			

第3表 石器・玉観察表

挿図	種類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重さ (g)	調査時遺構名	報告書遺構名	時期	整理番号	写真	備考
J 1	管玉	緑色凝灰岩	14.0	3.5	3.5	0.14	No. 4 竪穴住居	竪穴住居	弥生中期	2	◎	一部欠く
S 1	石鎌	サスカイト	28.5	13.5	3.0	1.27	No. 4 竪穴住居	竪穴住居	弥生中期	1	◎	完形品
S 2	石錘	ひん岩	60.0	53.0	47.0	192	No.19建物	掘立柱建物 8	弥生中期	5	◎	有溝
S 3	石包丁	緑色片岩	63.5	41.0	9.5	34.9	No. 2 土器溜り	土器溜り 1	弥生中期	4	◎	半分
S 4	砥石	流紋岩	37.5	20.0	15.5	10.1	No. 5 土器溜り	土器溜り 2	弥生中期	3	◎	4面使用

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまがたふくだいせき									
書名	山形福田遺跡									
副書名	一般県道堀坂勝北線整備事業に伴う発掘調査									
卷次										
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告									
シリーズ番号	148									
編著者名	浅倉秀昭									
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター									
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3						TEL 086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会									
所在地	〒700-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6						TEL 086-224-2111			
発行年月日	2000年1月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °, ′	東經 °, ′	調査期間	調査面積	調査原因		
やまがたふくだ いせき 山形福田遺跡	おかやまけん 岡山県 かつた ぐん 勝田郡 しょうばくじゅく 勝北町 やまがた 山形	3362401	98	35° 40'	134° 5'	1998.07.23 ～ 1998.08.06	43m ²	一般県道 堀坂勝北線 整備事業		
						1999.04.05 ～ 1999.06.17	500m ²			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項			
山形福田遺跡	集落	弥生時代中期	竪穴住居・掘立柱 建物・土壙	弥生土器・石器・管玉						

1. 調査前の状況
(南から)



2. 1次発掘作業



3. T-4-1
竪穴住居断面
(西から)



図版 2



1. 遺跡全景



2. 調査区全景



1. 調査区北部



2. 調査区中部



3. 調査区南部



図版 4



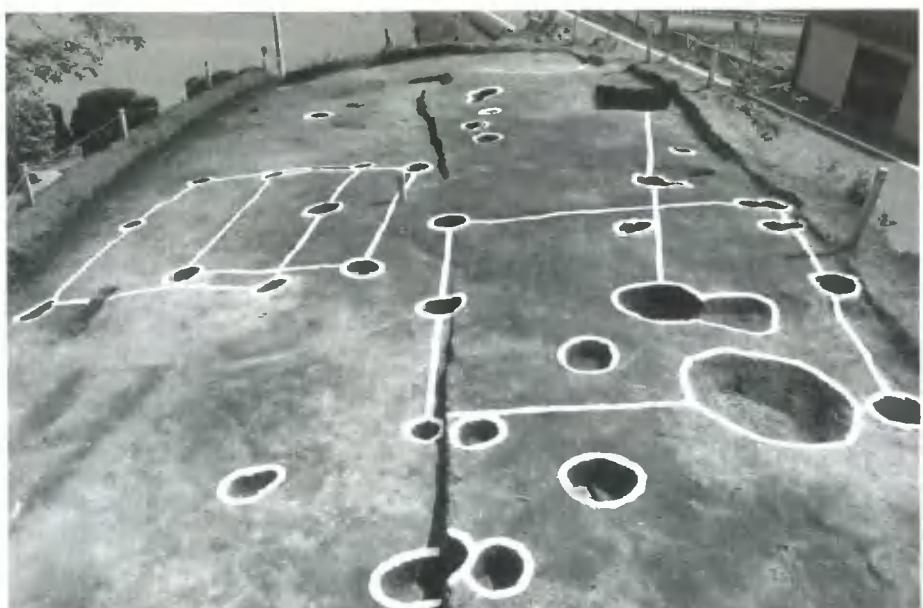
1. 竪穴住居



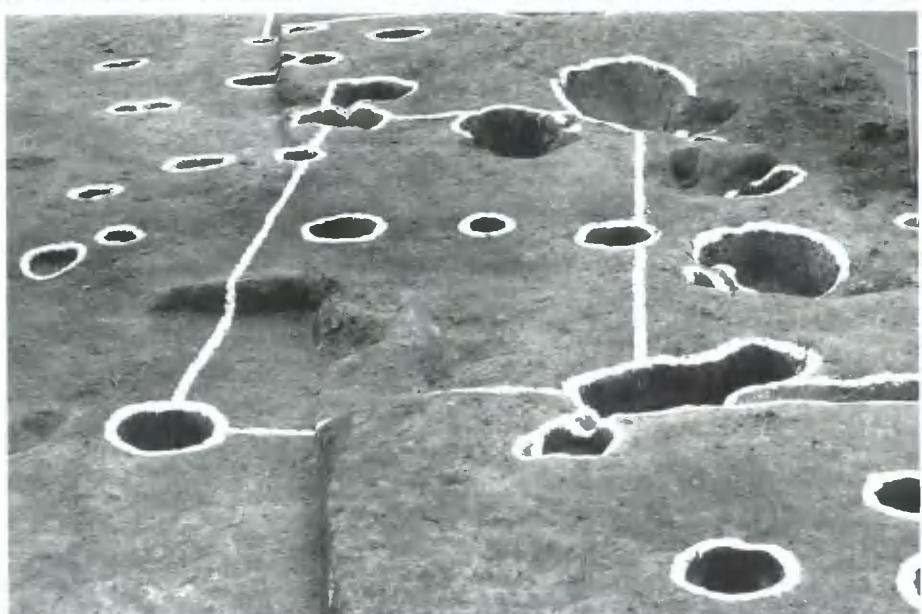
2. 土層断面



3. 復元住居



1. 南部掘立柱
建物群



2. 掘立柱建物 5



3. 掘立柱建物 8

図版 6



1. 土壌 1



2. 舟形土壌 1



3. 舟形土壌 3



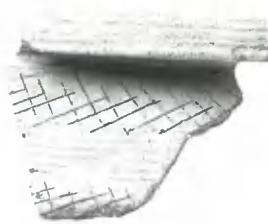
4. 舟形土壌 2 及び高坏出土状况



21 (1/4.5)



25 (1/4)



29 (1/3)



22 (1/4.5)



23 (1/4.5)



30 (1/8)



32 (1/3)



35 (1/4.5)



27 (1/4)



33 (1/4)



48 (1/4)



34 (1/4.5)



36 (1/4.5)

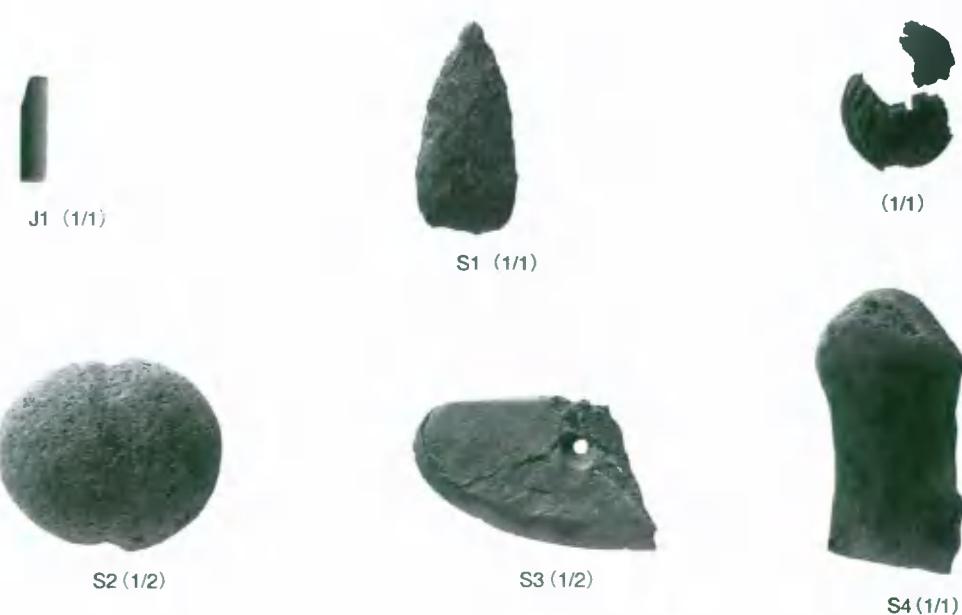


49 (1/3)

図版 8



出土土器 ②



石器と種子

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告148

山形福田遺跡

一般県道堀坂勝北線整備事業に伴う発掘調査

平成12年1月28日 印刷

平成12年1月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2